

詩人の生活に於ける天文學

A・D・ワットソン
T・E・生 譯 註

カシオペア諸星の上なる腰掛

鷺の翼よりとりたる羽筆

火星^{マーズ}の沼地より拾はれた草紙^{パピラス}と

闇黒のインク而して歌ふてよき許しとあり

パン神の蘆笛もてする牧羊者の吹奏よりも

我れ我が歌をより大なる樂旨に充てはめん

我れは歌はん牧夫の獵犬^{カライヌ}走れる所に

つけ行くケンタウルスの足音に合せて

そは我れ夜を徹しても耳傾けつ

聞かん遙か強度の光の中に

深きとこよの琴のね傳う

いよよ大なることばの調べを

天文學者は詩人よりも定義を與へ易い。然し彼等には多くの共通點がある。前者の主要な器械は數學的過程であり、後者のそれは想像と感情とである。

彼の想像力を使用する天文學者は詩人である。星の問題に正確な思考を適用する詩人は天文學者である。天文學者は若し同時に詩人であれば、より優れた天文學たり得るであらうし、詩人にして同時に天文學者であらば、より秀でた詩人たり得るであらう。

天文學者であるが故に天體を發見せなければならんと云ふ要はなく、詩人であればとて實際の詩を作るの要はない、事實上の天文學者は宇宙的法則の關係を以て思考する。本質的詩人は無窮の本體の關係を以て感じるのである。我等は偉大なる天文學者が有力な詩人である事を悟らずしては正當な見解を彼について抱く事は出来ないし、又最も著名な詩人は其思想を基本的永遠的な組織化された智識の輪廓になぞらへたのである。ホーマー、バール、セークスピア及びミルトン等は皆有力な天文學者であつた。彼等は已が能力の全範圍を働かして威大な絃歌を奏したのである。然し彼等は天界に於ては既に自己の靈魂中に建設せられた以外の法則をも調和をも發見する事がなかつた。外圍の美觀も調和も、その自己存在の終局的組織中に夫等の相對物を見出さな

い者に取つては恰も無きに等しいのである。

神と人間との計畫、彼等の感情と功績、彼等の勝利と其運命、是等は凡て幻と能力との詩人の奏曲目錄中に存するのである。彼等の技巧の旋律は凡て宇宙的情緒に調和せしめられる。彼の精力は凡ての精力が靈的であるが如く靈的である。天文學者は彼の智力のみでは天空を究め盡す事ができない。然し尙ほ天空は彼の澄んだ心耳に彼等の秘密を囁かんとして屈まつてゐるのである。彼は決して自然の全趣旨を曝露させ得ないが、又人生の全部的意義を究め盡す事も出来ない。然も無窮の生命と殆ど無邊際な宇宙とは彼等の强健な遙かに飛翔し得る翼にとつては廣大に過ぎるものではない。是等の何れもが彼が所有してゐる牧場に於けると等しく稍遠方なプレーデスの庭に彼の天幕を張る事の様である。

下級天文學者は小詩人の如くに部分的の幻や小局的利益を以て又個別的星辰や草花や月光を浴びた谿谷を流れる小川、鳥類や、歌や家庭的情愛等の外部的特性を以て満足してゐる。然し大詩人は大天文學者と同じく凡て之等を宇宙と連結するものである。彼

等は彼等のより大なる思想、より大なる幻とより深刻なる感情とに對して範圍と振幅とを有しなげならぬ。彼等は智力を其限界迄働かせ、然る後靈感の翼に乗じて實在のより廣大な原野に漂ふのである。眞の天文學者と誠の詩人とは天空にて邂逅する。そは彼處には凡て眞正の偉大が所有する無境涯なる心意の自然的住居が存するからである。

天文學者と詩人とは二個の人格として會合する事もあり得、又一個の個性中に共に存する事もある。ローエル天文臺員の中には彼等は兄弟として會合した。實際彼等はより廣大な意味で、天文學者は法則の最高優越に於て、詩人は想像の莊嚴なるに於て兄弟として相邂逅する。我等は詩歌と天文學の雙方に於ける最高の成功についての此上なき表示が一個人中に會した例を曾て見出さない。全く靈感を受けた詩人も曾て眞の優秀な天文學者であつた例はない。大成功を遂げた天文學者も曾て靈感に觸れた詩歌の創作者であつた例はない。かの天文學者は一天文學者として自らを知つて居る。彼は嘗て一大詩人であると夢想だもしない。然らずして若しかく妄想する

とせば彼は誤つてゐる。世界的地位にある科學者も優秀な性質の詩法でもつて何事をも決して計畫しない。勿論ゲーテは形態學の開祖であつた、それは幸福な靈感であつた。同様の方法でエマソンはダーウキンが植物に於ける彼の斷案を陳述する以前に進化の法則を暗示したのである。是等兩詩人は靈感を受けた人々であつた。科學界に於ける彼等の功績は終局的分析に於ては智的といふよりも寧ろ靈感的である。詩人は純正科學者が觀察しなかつた科學的一問一題の或微妙な形相を認識するものである。なんとなれば時として彼は彼の曳網中に驚く可き真理の財寶を獲得するからである。

誰か博識のコペルニックスが詩人の精神を以つて彼の研究の遠大な利益を實感したのを疑ひ得よう。彼の獲物を追求して其の終局の臥所に至り、彼が天體の新組織を發見した時に彼の全存在を通して如何に情緒の激發が搖いだ事ぞ。ニュトンが彼の論述した宇宙的法則の最初の曙光にいかん感じて心魂に徹せしめた事よ。彼の計算の結果が誰か一人の助手ありて其計算をその明白な結論に迄導かなければなら

ないと洩らした時に彼がかくのごとく感動させられたとすれば何と驚くべき事ではないか。彼の數學は凡ての天文學者に於けると等しく彼にとつては自己の想像の翼から取られた一つの羽筆に過ぎなかつた即ちかの靈感の翼であつてそれを以て彼は遂に彼の成功の高嶺に翱翔したのであつた。

天文學界に於ける詩並に詩的氣概は空想でなくして、冷かな智的過程が會て此の天空の科學に於て發見し得たよりもより高き價值と意義とを啓示して、全然眞實且つ合理的なものである。望遠鏡の眼力は實際天文學者の最高の器械であり、そして其の活動の媒介者は光線である。然し假面する夜間の親切な奉仕なくしては眼力に關して最も顯著なる事柄はその近視眼たる事即ちその憐れむべき制限である。天文學者は彼が地球の隠す蔭から觀望して學び知る事の外、彼は天體に就いて殆ど知り得ないであらう彼のエリムの山地の權力ある獵夫にしてバベルの建設者、又はシナルの地の牧羊者が根氣よい星の下に立つて一體それが何を意味してゐるかを凝視して居ると想像してごらん。彼が靜寂にして壯重な夜の

威嚴を實感した時に初めて彼に了解せられて來たかの壯嚴さは如何に恐畏すべきものであつたらう、不可思議の前に立つて如何に無垢の驚愕と謙卑との生じた事であらう。未だ教義の假設と其の心理學的複合物、其の悲しむべき理智の行詰り、其の想像力の麻痺、又其の宇宙的科學と詩歌の致命的禁止によつて其兩翼が剪み切られなかつた以前に彼の想像力は如何に廣大な自由な天空を飛翔した事であらう。

我等のより完全な天界探險に於て夜間の助けが満一無かつたとすれば、我等は天空を仰ぎ見た最初のカルデヤの聖者の知つて居たと殆ど相違のない程少ししか現在智識を有しなかつたであらう。何んとなれば晝ばかりが續く状態の下では微々たる進歩しか無かつたであらうからである。唯詩的樣式に於てのみ天文學者は充分に夜間の科學的意義を實感するのである。例へば此の地方的暗黒、此の見難いスピンドル（紡錘）、此のより近い光體を蔽て而もそのカーテンを巻き上げて星の劇を出現する細長い蔭の針を考へて見給へ。それは太陽中に基礎を置いた光の一圓錐の頂上が地球によつて切斷され、その後空

の周邊を旋回し、又時としては月を横ぎつて更に遠方に急過する怪しい蔭の手中に折れ込むが、然し決して黃道十二宮に沿ふて歩む最近の無宿者にも到達しないものである。

天文學者なる詩人は凡て他の遊星や衛星はそれ自身夜の暗黒のスピンドル（紡錘）を有してゐる事を實感する。彼は木星の蔭が空中を屢其の月を蝕しながら略七千五百哩に達する事や又是等の月は隱影を投じ、その隱影は木星の視表面を通過し、從つて我等が夏に小望遠鏡で覗かうと思ふ時には殆ど毎夜是等の經過と蝕とを見得るものである事を示めす爲に殆んど數學を要しない。まあ月の夜のスピンドル（紡錘）について考へて見給へ。地球の夜の針が我等の衛星を打つ時には我等は月の蝕を見、然る時は月の影は影中の影となる。然し月の影が直線的に地球の方に投せられる時には、若し我等に達する丈け長くあれば我等は皆既日蝕を見、若し短かければ太陽の金環蝕を見る事となる。かくの如く總の遊星も總の月も銘々空の周に搖れる暗黒のスピンドル（紡錘）を有するものである。

此の地球の夜間なくしては世に天文學が我等の文明の基礎に於て多方面に互つて存するかの眞理の尊い團りと比較され得る價值ある科學たる事は不能である。晝間の狀態が特別に良好な時それ等稀な機會に金星又は木星のはんの一瞥や、太陽光線より明るい稀な彗星や、奇怪な流星が時として破裂の音を立て、空を燃えつゝ横ぎるの等を我等は見得るであらう。我等は極光の爆聲さえも聞き得るかも知れないが、然し我等は如何にして何が原因で其音がしたかを知り得るだらうか。我等は度々晝間に月を見よう。そして彼女が太陽の視表面を通過する時には我等は恐れ乍ら『日蝕だ』と云ふに足る丈の事を知るのであらう。

かゝる狀態の下には我等は光の過多な爲めに盲するであらう。我等の天文學的天空は『眞晝の光のたゞ中に暗く』なるであらう。我等は遊星に就て少し許、恒星に就いて更に少量しか知り得ないであらう。銀河、星團、星雲、連星、木星の月や光線の速力に關する其の重要さ、凡て是等の事は我等の未知に屬するであらう。我等は如何にしてトレミー又コペル

ニックス又ケプレル又アインシュタインを知つたてあらうか。我等の夜間に乏しき爲に蒙昧にされて永久的晝間にあり乍ら凡ては盲目で我等は天文學的破産をなし、詩人は光の沼地に乗り上げ、我等は導かれて哀願するに至るであらう——

來れ、星の眼もてる柔和なる姉妹よ、

黒き指もて汝が廣き領分を開け——

不思議なる空の是等原野を我等の視力に

來れ、柔和なる姉妹の夜間よ。

靜寂に來れ。我等共に遙に聞かん

時の退く響き既に減じて

やがて夜間と靜光と音樂の來りて

我等の心に宇宙歌の唱せらるゝ迄。

プランコー、ホワイトが次の如く書いた時に彼は全部的光景を見たのである——

オ、太陽よ 誰が思ひけん かゝる暗黒が

汝が光線中に示顯せられあるを。

誰が見出せしや 花、葉、虫は示顯せらるゝに

かゝる無數の天體につきて汝が我等を盲せしことを。

凡て是等の趣味ある情緒と満足とに於て天文學者は詩人の中に熱切な伴侶を見出す事は明白な事實である。天文學者は彼の成就する事實に由つて彼の詩的本性を證するのである。彼と同じく詩人は直接事に於ける彼の利益を減じて以て未知遠隔の事實を穿鑿するのである。彼は自らを天文學者の如く日常の利害から出来る丈け遠ざけて隱影の環境中に置くのである。社會を併吞する凡て是れ等他の利害、そしてその中にあつて世人が眞晝の輝きを詳説するものに關しては彼は夜をもたねばならぬ。彼は自己の靈魂の庵にあつて彼の想像の兩翼を嘴でつゝき乍ら繕ふものである。何んとなれば唯かくしてのみ彼は起つて彼の思想の最高天上界に飛び入る事が出来るからである。彼は地の利害を天文學の夜の狀態に迄暗からしめる。然る時に始めて天文學者に彼等の永遠的住處の畏るべき靜肅を破つて見る能はざる法則が現はれ来る如く啓發された最深部の諸星が彼に示現するのである。

天文學者は美術家、詩人及聖者に似て彼の探索の熱心の度に比例して物質的な事物を棄て、無窮の宇

宙に棲息するものである。此の拋棄の分量こそは彼が天文學者、美術家、詩人、聖者としてその何れたりとも彼の純正の唯一の證據である。如何なる美術家と雖も彼が亦無窮のかの原野を知らうと欲して飛翔するに非ずば最高の成功に達する事は出来ないであらう。模倣——習慣はその雙子の姉妹であるが——は詩人及び美術家に於ける事教義が聖者に於けるが如く麻痺的合成物である。天文學者の眼が夜間の防禦的制限物を必要とする如く我等の智的及び靈的能力は若しそれらを目的論的眞理により充分に貢獻して詩歌、美術、宗教の世界に於てか、或は天空の奇觀に使用せらるゝとせば凡ての直接的の利害を抑制するの必要がある。蓋し暗黒は光明の僕であるからである。

凡ての時代の預言者を山——ホレブ、シナイ、カルメル、ヘルモン——に召した彼の嚴肅な必要は天文學者を導いて、默想に適する高雅な靜寂な地、彼處で彼の環境は地が減少し、天が擴大される彼の觀測の山に至らしめるものである、彼は彼の感光板を數時間天に向けて保ち、そして最大能力の望遠鏡で成就

せられた結果よりも大きな結果を得るのである。其の長い間彼自身の靈魂の感光板は夜の廣濶と平穩でもつて感銘せしめられるのである。彼は天空の市民である、然し彼は暗室^{カメラ}の中で仕事をする。

天文學者の其の仕事に對する献身は若し彼が實質的成果を得ようと願ふならば癡癡性のものであつてはならない。彼は闇黒を己が住居と爲さなければならぬ。彼は廣濶な夜に棲む住者でなければならぬ。

天文學者は流刑中に彼の最善の事業を成すのである。その通りヴィクトルユーゴー、ウアグナー、ダンテ及び聖ヨハネは爲したのである。謫流の地でない天文臺とは何んするものぞ。テヒヨー・ブラッヘとケプレルはウラニブルクの島嶼觀測所に於て流竄の身ではなかつたか。ハーシエルとジルは喜望峯に於て他の何者であつたか。又、フラグスタフに於けるローエルは如何、又、アンデスの傾斜面に於けるピケリングは如何。又、ハミルトン山やウイルソン山で有名になつた人々は如何。又、ヴィクトリア附近の島山に於けるカナダの天文學者は如何。我等が彼等の火もて晝かれた日沒に關する觀念の故に是等凡ての

人々を羨むと同時に科學に對して彼等は身命を聖別した者である事を思ひ浮べるのである。天文學者は闇黒の中に包まれて都市の煙と熱の上に、又村邑の塵芥の外に擧げられて居なければならぬ。實際に彼は出来る丈け遠く文明から離れて居なければならぬ都會に住居する天文學者でも稍彼等の慣習に於て質朴なものである。彼等は決して居酒の溺醉者として知らるべくもない。彼等は生存競争を避ける。彼等は社交的會合に屢顔を出す様な事はない。彼等は殆ど隱者的退隱の中に生活し『より廣大な世界』に住まうものである。

天文學者も詩人も共に統治の不見法則や靜かな不可思議な自然の活動中に存する生命を觀取する。彼等は先見者で預言の能力を働かす。凡ての預言者の職能中之れは彼の職分を表明する事いと少い特性である。之れは亦天文學者並に詩人にも眞實である。然し民衆は依然預言者を見倣して預言する者とし、天文學者を蝕を預言する者とするのである。

預言や、幻は總て當然に透逸な人には普通な事である。天文學^{アストロノミー}と云ふ言葉自身が法則を聯想せしめる

星の法則を學ぶ學生は何れの所でも法則の支配を認め、そしてある意味に於て天文學は法則の探索を其の最も遠い限界迄運ぶものである、天文學者は彼の法則の探求に於て空間の最も遠い邊疆を探險する。

それは彼の熱情である。ラブラスが星雲説を陣述し世界がそれを終局的のものとして受け入れたと云ふ丈けでは充分ではない。天文學者は依然彼の探求に執着してゐる。それ故我等は宇宙の起源を説明する爲に昨日と等しく諸學説を有してゐるのである。ニユトンが明白な斷定を以つて萬有引力の法則を實證したとすればどうであらう。又、ユークリッドが幾何學的手續の法則を立てるとしたら如何。天文學者は宇宙なる彼の研究室に止まつて一物體が空間に移動する時には新法則と大さとを有する他の幾何學の諸系統が含まれて居る事を證明するであらう。

他の總ての科學者の如く天文學者も常に新生面を開かんとし、新紀元の門戸に立ち、新法則の發見を刮目して待ちつゝある。そして若し詩人の直觀が更

に迅速に活動して居ないならば彼等法則を發見する第一人者は彼天文學者である。天空の闘場に於てさね靈感を受けた詩人は應々天文學者に先鞭をつけるのであつて恰もヨブ記の記者が

彼は地を物なき所に懸け給ふ

と書いた時の如きもそれである。若し天文學者が詩人を導いて發見の新原野に至らしめる様に思はれるならば、それは時として一つの外觀に過ぎない。其理由は我等が既に努めて示めさうとした様に、世に最も熟知せられる天文學者は自ら眞の詩人であり預言者であつて、天文家詩人の此の先見的能力こそ彼を促して自らを其假設に導く終局的跳躍をなさしめるものであるからである。

此の幻の能力が人生の各方面に於ける凡ての等しく啓發された靈魂に共通な事は眞實である。それは偉大の先要物である。如何なる經驗ある醫者にして優秀な診斷學者が困難な患者の症狀を正確と迅速と

を以て決定する事を尊敬しなかつたであらうぞ、診斷學者は彼の患者を正確に且つ人をして獅子の飛躍を想はしめる底の神速と決定とを以つて診察する。

此の決斷的性格は美術界に卓絶せる凡ての男女に特に著しく現はれてゐる。それは純正の詩人の終局的試金石である。宇宙の法則に調和一致する靈魂は殆ど驚く可き能力を所有して居る。それは蓋し彼は宇宙精力の一部を自由に制御してゐるからである。彼は自由にそれを如何なる方面に運動精力たらしめるかを決定し、その凡ての可能性を表はし、其の能力を現實にし、そして彼の夢想を實現せしめる事が出来る。

詩人は天文學者と等しく而して更に直接方法によつて大洋は默然たる全能者に服従して讚美しつゝ岸邊に打ち寄せるものであることを知つてゐる。恰もテニスンが云つた様に――

『若し彼れ法則に由つて雷鳴し給はゞ』

雷鳴は依然彼の御聲なるなれ』

(次號にて終結)

The Higher Pantheism.

略註

草 紙 草 (パヒラス) さて古埃及人の紙を製するに用ゐし草、即ち「かみがやつり」なり。我等の耳に熟せるペーパーの語源はこれなり。高さ一丈、見事なるは一丈五尺に達す。莖の下部は直径二三寸、裸にて葉は長くして鋭く頂上に叢生す。莖を摘み砕き、日に乾して製するもの即ち古代の紙なり。詩人は火星の沼地に叢生せりと信するパヒラスにて製造した紙を意味せるなり。大なる思想よ！

パン (Pan) ギリシヤ神話に現るゝ神。もミアルカヤ地方にて崇拜せられたる牧畜保護の神にして此神自ら既に羊體なり。ギリシヤ神祇史上に於ては低級の神に屬す、但しパン神は音律の妙手にして自ら蘆笛を製し、これを吹奏するときは、聞く者恍惚として、梁上の塵亦自ら動かんとする概あり。こゝも其容貌甚だ奇怪にして一見人をして恐怖戰慄せしむるものあり云ふエリムの山地の權力ある獵夫にしてパベルの建設者 ニムロデを指す舊約聖書創世記十章八節から十四節迄參照

シナルの地の牧羊者、最初のカルデヤの聖者 多分アブラハムを意味せしならん。創世記十五章五節參照

彼は地を物なき所に懸け給ふ 舊約聖書ヨフ記二十六章七節參照

◎訂正 印刷所で出来た誤が英字に澤山ありますが重な點だけ訂正しておきます。

百六十五頁より變光星のuは總てvの誤△百六十六頁の表のeはケフェウス座エプシロン、aはトカケ座アルファ、iはケフェウス座イオタ、zは同じくゼータでギリシヤ文字が無い爲に略されました。△百七十頁の十行の第壹圖は第二圖の誤です。(中村要)